子ども達の笑い声が聞こえるキャンパスで

学長からのメッセージ

ナーサリーから大学院までが同じキャンパスにあるお茶の水女子大学では、頻繁に小さな子ども達と出会う機会があります。子ども達が体中で自分の意思を表現している様子や、可愛い笑顔に出会って、心が癒されることもあるでしょう。私も、本館の中庭などで遊んでいるナーサリーやこども園の子ども達の姿や、学長室の窓から聞こえてくる小学校や幼稚園の子ども達の声に、疲れを忘れることがあります。子ども達の笑い声が溢れるキャンパスに身を置いているということは、なんて素敵なことなのだろうと思っています。

本稿では、現在では当たり前になっている「子育てを温かく見守り支援するお茶の水女子大学」を実現するために進められてきた取り組みを紹介します。これからの社会を担って下さる皆さんには、こういった当たり前のことさえも、決して簡単に実現できた訳ではないことや、たとえ困難なことであっても「意思があれば実現できる」ということも、知って頂きたいと思っています。そして、正しいと思ったことには、勇気をもってチャレンジして頂きたいと思っています。

若い皆さんには、まだはっきりと認識できないかも知れませんが、女性達が多様な分野で活躍し、仕事を続けていく上で、出産と育児が大きな制約となることが多い状況があります。特に、本学の卒業生が活躍している研究や教育の場など、時間的にも厳しい条件下で働く女性達が、家庭を持って働き続けることの出来る環境を作るためには、職場や家庭の積極的な協力と努力が不可欠です。

2000年初頭に、私達は、学生や女性研究者の子育てを支援するために、当時のお二人の学長のご理解の下、教員や大学院生・ポスドクの方々と共に、本学に学内保育所を作りました。現在では、様々な大学や研究機関に保育所を設置する事が当たり前になりつつあり、政府もそれを支援していますが、当時は多くの課題があって、学内保育所の設置は簡単なことではありませんでした。

発端は1999年秋の日本学術会議の研究連絡委員会でした。そこで群馬大学の委員の方から「病院付設の保育所の増築を検討している」と聞いて、「国立の女子大学として女子教育の先頭に立つはずのお茶の水女子大学に、なぜ若い女性たちを支援するための保育所がないのだろうか」と素朴な疑問を持ちました。そして、「本学にも保育所を作りませんか」と呼び掛けたのですが、「文部省（現・文部科学省）の施設の中に厚生省（現・厚生労働省）の施設を作るのは無理な話」「居住地から離れた大学内に保育所など作っても役に立たない」「そんな予算をどう工面するつもりなのか」など、反対意見がとても多かったのです。その中で、化学科の松本勲武先生と生物学科の西川恵子先生、そして私の研究室の若い人たちが「これからのお茶の水に必須の施設だと思います」と賛同して下さったこともあって、当時の佐藤保学長にご相談に伺いました。佐藤学長は「これまでにも保育所開設の提案はありましたが、いつも立ち消えになっていました。なぜ無理だったのかを検討しましょう。そのために、他の国立大学の保育所の現状を調査してみて下さい」と仰って下さいました。

そこで私たちは、先ず、当時99あった国立大学全てに電話をかけて、保育所についての情報を集めました。「お茶の水女子大学には医学部も病院もないのだから無理でしょう」と、けんもほろろに電話を切られてしまうこともありましたが、北海道大学の厚生課の方、金沢大学の厚生課の方と保育園長さんの親切な対応と励ましに後押しされ、99の国立大学全ての電話調査と書面による確認作業を終えて、調査報告をまとめることが出来ました。

佐藤学長はその報告を国立大学協会での議論に供され（国大協「国立大学における男女参画を推進するために　報告書」2000年）、学内に「保育施設に関する調査研究会」を、次いで「設置準備委員会」を組織して下さいました。幸い、3つの学部から数名の教員の方が手を挙げて下さり、また、私の研究室の若いポスドクや学生たちが総力

を挙げて手伝って下さって、全学的なアンケート調査も実施し、学内の需要や要望も調べ上げることができました。「文部省が設置する国立大学で保育所を設置できるのは、厚生省の施設である病院がある大学だけ。医学部も病院もないお茶の水女子大学に、厚生省の施設を作るのは土台無理」との声も、活動を続ける間に少しずつ小さくなり、準備委員会で具体的な案を検討し始めた頃には文部省が「霞ヶ関保育所」を作る計画が公表されて、「無理だ」との意見はほとんど鳴りを潜めました。

2001年4月に佐藤学長からバトンを引き継がれた本田和子学長（本学初の女性学長です）は、保育所設置に熱心に取り組んで下さいました。先ず、授乳とオムツ替えができる授乳室が出来上がり、明るい素敵な部屋に、サン・リオから寄付して頂いた可愛らしいベッドやソファー、椅子、布団などが設置されました。

さらに本田学長の「幼・保連携」の方針の下で、保育施設を幼稚園の中に作ることの検討が始まりました。そして、紆余曲折を経て、2002年に幼稚園の一角に「いずみ保育所」が出来上がったのです。「いずみ」は本田学長による命名で、「成長の源」の意味が込められています。病院を持たない国立大学では、初めての保育所でした。その後、乏しい学内予算をやりくりして、幼稚園と園庭を共有できるように職員宿舎の一部を改装した施設も出来上がって、2005年度からは大学附属の「いずみナーサリー」が開所の運びとなりました。

小さな一歩ではありましたが、このことを通じて、人の幸せに役立つことは願えば叶うこと、そしてその際に組織のトップが先頭に立って動いて下さることの重要性を学びました。

なお、2002年と言う年は、本学にとって大きな意味を持つ年でした。女子大学が持つ役割と意義について深く議論し、世界中の全ての女性たちの夢の実現を支援する大学として歩むことを決心して『学ぶ意欲のある全ての女性にとって、真摯な夢の実現の場として存在する』とのミッションを掲げ、日本だけに留まらない教育と研究活動を開始したのも、2002年でした。GAZETTE 255号（2018年2月号）でご紹介したアフガニスタン女子教育支援を開始したのも、この年だったのです。

現在「いずみナーサリー」では、若い学生・大学院生や教職員などの子どもたち（6ヶ月～3歳未満）二十数名が保育されて居り、さらに、2015年から文京区との連携で設置された「文京区立お茶の水女子大学こども園」では3歳児から5歳児まで、約90名の子ども達が保育されています。「乳幼児がいるキャンパス」は、学生の皆さんにとっても、多様な年齢の人々が共に学び合う優れた教育機会となっていると言えましょう。さらに、いずみナーサリーでは、本学の学部生と大学院生には、保育料の二分の一を奨学金として授与する仕組みも作られています。

なお、「いずみナーサリー」の設置に向けて一緒に活動してくれた若い女性研究者が、「いずみ」で子育てをしながら研究成果を挙げて、その後、他の国立大学の准教授として、当該大学での男女共同参画において大きな力を発揮しています。このことも特筆すべき成果だと思っています。

以上に述べたことは、本学の女性の活躍を支援する活動のほんの一部ですが、お茶の水女子大学では、他の大学に先駆けて、育児や介護等と両立可能な学習環境と、きめ細やかで質の高い学びと交流の場を作ることに、努力して来ました。そして、嬉しいことに、それらの活動は、女性の活躍を推進する環境づくりであると共に、女性自身の意識変革や、不安や悩みの解消、自信を涵養することにも役立つ活動として、内外の注目を集めています。

2019年2月

お茶の水女子大学長　室伏 きみ子

学長からのメッセージ